

随筆



5年前のアフガニスタンを想い、
5年後の自分を想う。

那覇市立病院
佐久間 淳

初めまして。僕は那覇市立病院初期研修医の佐久間 淳というものです。今回縁あってこうして「県医師会報」に文章を寄稿する機会をいただきました。僕が5年前の2003年にアフガニスタンを訪れた際に書いた文章を載せようと思います。アフガニスタンで医療支援活動を行う医師や看護師たちとともに、医学生だった僕はアフガニスタンのカンダハルという街を訪れました。

—カンダハル大学の医学生に「私達を救ってほしい」と言われた。

あなたは誰かに「救ってほしい」と頼まれたことがあるだろうか。

「救ってほしい」と頼んだことがあるだろうか。—

パキスタン南部の町クエッタからアフガニスタン、カンダハルまで陸路8時間、うち国境越えに2時間。峠を一つ越えるが、それ以外は砂漠の荒野が延々と広がる不毛の大地。国境を越えてから所々戦車の残骸や爆破された橋があるものの、比較的穏やかな感じ。でもカンダハルが近づくにつれて様子が変わってきた。検問の数が増える。

その検問でニヤニヤと言うかトロンとした目付きの兵隊が、機関銃片手に「何しに来た？」という様なことを運転手に言っている。「こいつこの眼で簡単に人を殺すんだろうなあ。今までに何人殺したことがあるんだろう」などと思ったら、恐くなってしまった。日本ではもちろん、海外を旅する中でも嗅ぐことはなかった戦争の匂い。目の前の戦闘の恐怖。僕たちが国境

でチャーターした車はブレーキを踏むと『小さな世界』が車内に流れるように改造されたお間抜けワンボックス。こんな時に限って車内には「せかいぢゆう、だれだあってえ〜」のメロディーが空しく流れる。「僕は一体ここに何をしに来たんだろう？」多分周りの参加者たちも同様に緊張を覚えたはず。「戦争の恐怖を知らない僕たちがノコノコとここで何をするつもりなんだろう」戦場で働きたい、なんてバカなんじゃないの？本当に不幸な人たちのいる場所には、僕は立ち入ることさえこんなにビビってしまう。

そしてカンダハル。アフガニスタン南部の中心都市で、タリバンの本拠地があったことから日本でも度々耳にすることがあった名前。ソ連侵攻から内戦を経てアメリカ空爆まで、23年間戦争が続いただけあって、破壊された建物や廃墟が目立つ。それって日本でもニュースでよく見た光景。でも実際は、予想していた以上に人々は地に足つけて生きているように感じた。たくましく生きている、という感じ。僕たちはカンダハル滞在中、午前中は2カ所の難民キャンプと市内にある診療所、そして郊外の村で診療を行って、午後は、大学や中学校、小学校、市民病院に行って日本から持ってきた医療品や顕微鏡などの贈呈式、兼視察を行なった。決してキツイスケジュールではないにも関わらず、日々の疲れは相当なものだった。実際に滞在中一日は、滝のような下痢が止まらずダウンしてしまった。

ここから先、文章をどのように進めていけばいいか、悩んでしまう。

「難民キャンプではこんなことして、診療所ではこうで、こう感じてだからこう考えました」というのが筋だと思う。確かに一緒に行った日本人医師、現地のアフガン人医師に付いて医療活動はしたけど、色んなことを感じたけど、考える、ということが難しい。僕の中で考えが進まない。例えば、プロジェクトの一つとして、日本の小学生と絵を交換するために、カンダハルの小学生に絵を描いてもらったときの話。草や花、家の絵を描く子供たちの中に、戦車

を描いている子がいた。「格好いいから（戦車を描いたの）？」と聞くと「うん、これに乗ってアメリカ人と戦うんだ」って。どう考えればいいんだろう。「よし、この子たちに必要なのは教育だ！」と言うかもしれない。そこで考えてしまう。教育って何だろう？何を教えるんだろう？「アメリカは悪くないよ」ということだろうか。

アフガニスタンではタリバンの残党の存在もあるが、部族間の争いが今も続いている。カルザイ大統領の影響力は首都カブールからアフガニスタン全域に及ぶものではもはやなく、地方では今も戦闘があるらしい。いつ家族が殺されるとも分からない人たちに向かって「争いはやめろ！争いは争いを生むだけだ！」というのはあまりに説得力がない。僕たちはこの人たち以上の何を知っているのだろうか？アメリカの汚さだろうか？「ブッシュが悪い」「小泉が悪い」とTVのスクリーンに向かって罵り、憤るだけの、何も動こうとはしない醜い日本人の顔だろうか？彼らに教えることのできる何を、僕たちは持っているんだろう？彼らは僕たちよりも知っている。戦争の恐怖を。平和の難しさを。

難民キャンプの話も一つ。テントを一つ借りて、その中で診察を行う。乾燥しきっているせいか匂いはあまり気にならないものの、それはそれはひどい環境だ。井戸の水位の上がり下がりにより一喜一憂して、夏は酷暑、冬は極寒の砂漠の国、アフガニスタン。しかも生まれた土地から遠く離れたこの地でテント生活。笑えない。

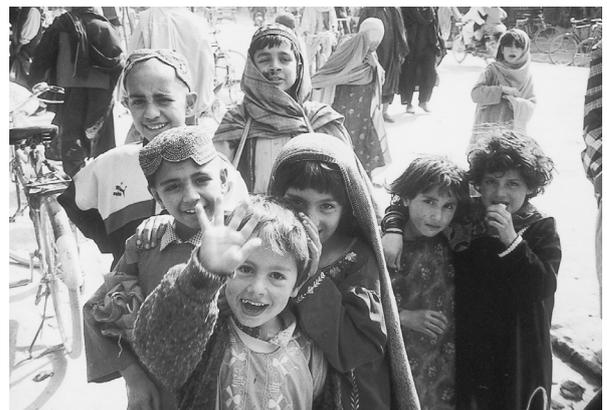
でも何を隠そう、当の本人たちは笑っている。よく笑う、というほどではないが、たくましい。僕は元気をもらってしまう。少しでも元気になるように、笑ってもらえるように、そのために来ているのに、なんなんだろう？何をしに来たんだろう？10年後、彼らを元気にできるだけの医療知識と技術を引っさげてここに戻ってきたとしよう。そして彼らを僕の望みどおり元気にして「ありがとう、ドクター」って泣きながら握手を求められて「やっぱこれだね」って思ったとしよう。それってただの僕の自己満足じゃないだろうか？僕がこの地を去

た後、「佐久間がいた時だったら助かっただろうに」って人がいっぱいいたのでは意味がない。むしろ、僕がきた時に東の間の幸せを見た分、かえって不幸になっていやしないだろうか？僕がその地で医療活動することによってだけの意味があるんだろう？彼らにとって本当の幸せは難民キャンプから故郷に帰ることだと思う。そのために僕は何ができるんだろう？自己満足ではない慈善活動、国際協力の形とはどんなものなのだろう？果たしてそんなもの存在するのだろうか？

それでも23歳の僕はまだ自分の進んできた道を、進もうとしている道をあきらめようとは思わない。そりゃあそうだ。まだ何もしていない、誰も救っていない。

アフガニスタンに行って分かったこと。何十年も大国のパワーゲームに翻弄され続け、世界に落胆しているものの、それでもまだ人々はあきらめていないということ、生きようとしているということ、そして救いを求めているということ。それはたった今も。

アフガニスタンを訪れてから5年が経ち、僕は23歳の僕が思っているような28歳の臨床家になれているのでしょうか？一つだけ確信を持って言えることは、自己満足ではない慈善活動、国際協力を求める想いはより一層強くなっているということです。あの頃よりも僕の中で守らなければいけないものは増えてきていますが、歩みはゆっくりになっているかもしれませんが、まだまだ進み続けていきます。





**老眼の効用
或いは詩の楽しみ**

ふじ胃腸科医院
宮里 不二雄

本年2月をもって満75才となり、正式に後期高齢者と認定されました。年間50万円余の保険料を負担しながら厚労省によって「無用者」の烙印を押される身とはなりましたが、自分ではまだまだ気力、体力とも充分のつもりであり、この上は健寿を貫き通して政府に一矢報いたい想いが日々強くなっております。然し老いの兆しは如何ともし難く数年来老人性難聴の進行に悩され身障福祉法の「六級障碍」のレベルに近づきつつあります。幸いにも「歯」は丈夫で、いまだにう歯は一本もなく、歯科医より80～20（80歳残存歯20本）は太鼓判とおだてられ三ヶ月毎にせっせとスクレーリングに通っております。老眼は40才代後半より自覚あり、生来の近視と相殺される事もなく遠近両用レンズを数年毎に更新し乍ら今日に至っております。老眼で困る事は読書、特に夜間や小活字読書による眼の疲れです。夏期はプロ野球のナイター中継を見乍らの「ながら読み」が楽しみの一つであり「ジャイアンツ」や「タイガース」の負けゲームではついついビールの量が増える筋金入りの「ドラファン」でもあります。眼の疲れのないテレビ、ビールの「ながら読み」を求めて辿りついたのが詩でした。

お母さん泣くのはよして下さい

ああ、お母さん泣くのはよして下さい
そんな惨ましい声はあげないで下さい
一生孤独を求めながら得られないで
さりとてなりはひのすべも覚えず
真実 阿呆のままのこのみすぼらしい私の姿

それでもお母さん 泣くのはよして下さい

私には私の生き方があると思っています
人間の世界に通用しなくても
もしかしたらけだもの世界に通用するかも知れない
あなたの子供はほんとうに正直に生き抜いてきました
少しは生きる姿がぶざまであっても
あなたの子供は今 狐のやうに幸福なんですよ
だから お母さん 泣くのはほんとうによして下さい

(一部省略)

青少年の不可解な事件のたびに親の過大な期待が子を追いつめたなどの物知り顔の薄っぺらの評を見るたびにこの詩を思い出す。

定本 尼崎安四詩集 昭54年 彌生書房
尼崎安四は38才で、白血病にて歿す。

暑中見舞いのハガキも例年通り数通のみだがこんな詩もある。

過「あやまち」

日々を過す 日日を過つ
二つは 一つことか
生きることは
そのまま過ちでもあるかもしれない日々
「いかが お過しですか」と
はがきの初めに書いて
「あなたはどんな過ちをしていますか」と
問い合せでもするようで一

詩集 北入曾 吉野 弘 青土社 昭52年

本詩人との出会いが詩への傾斜を決定づけたように思う。

父と子

朝起きて 庭に出る
隅の屑箱を何ものかが漁ったらしく
まわりに、ごみが散らばっている

—— 犬かな？ 犬だ、きっと
私より早く起きた老父も屑箱の散らばったの
を見たらしく
朝の食卓で
—— あれは猫の仕業だ と云う。
猫といたら猫しか想像圏に入れない父
犬といたら犬しか想像圏に入れない息子
まぎれもない親子である。
思わぬときに
遺伝というやつが私に会釈するのをなぜか受
けそこねて、ぼんやりしている。
(一部省略)

「目」の見方

目に裏表はない。
裏返され逆さにされて、目が回っても！
とかく、心は、見たものを見ないと云い 見
ないものを見たと云うが、
目は、目それ自身に正直だ。
その拳句、たとえ、運が裏目に出ても
目に表裏はない！
(大部分省略)

規制緩和という名の弱肉強食、成果主義、拝
金主義のはびこるなかで私共が失いつつある大
切な人間の感性を、持ち続けている貴重な人
種、それが詩人であろう。その感性をかりて自
分の感性をとり戻し、深めとき澄ませば、充実
した人生、明るい未来への展望も見えて来ない
だろうか。

今、最も好きな詩人を一人あげよと云われれ
ば躊躇なくこの人をあげる。

長田 弘 (おさだ ひろし)

詩集 深呼吸の必要 晶文社
ときには、木々の光りを浴びて、言葉を深
呼吸することが必要だ。と詩人は云っている。

あのときかも知れない

時計屋さんは散歩が好きだった。「きたな。」
きみの顔をみると時計屋さんは立ち上る。一
本脚で、たくみに。片脚がなかった。松葉杖
をついていた。時計屋さんは色々の話をして
くれた。「戦争さ。」戦争にいつておじさんは
片っぽの脚をなくした。おじさんだけじゃな
い。戦争にいった人は誰でも何かを失くし
た。死んだ人は人生を失くした。人生ってわ
かるかな。人が生きてくってことだよ。おじ
さんは人生を失くすかわりに、片っぽの脚を
失くした。「痛くない？」きみはたづねる。
きみは戦争を知らない子どもだった。「痛く
なんかないよ。痛いのは、こころだよ。」「こ
ころ？」子どものきみにはわからなかった。
だがあとになって、まったく突然にきみはず
っと忘れていた時計屋さんのことを思いだ
す。それはきみがふっと「あ、こころが痛い」
と呟いた日のことだった。そうだ、むかしな
かよしだった片脚の時計屋のおじさんもおな
じことを云ってたっけ。こころが痛いつて。
そのときだったんだ。そのとき、きみはも
う、一人の子どもじゃなくて、一人のおとな
になったんだ。きみがきみの人生で、「ここ
ろが痛い」としかいえない痛みをはじめて自
分に知ったとき。

(大部分省略)

人の痛みを知らない大人があふれる最近の世相
のなかで、心に滲る言葉を毎日深呼吸してみる。

随筆



沖縄---名も知らぬ 遠き島より

琉球大学医学部第二内科教授
高須 信行

「名も知らぬ 遠き島より
流れ寄る 椰子の実一つ

故郷（ふるさと）の岸を 離れて
汝（なれ）はそも 波に幾月（いくつき）」

島崎藤村 「椰子の実」

私は沖縄の人間ではない。では「なぜ沖縄にいるのか?」。「たまたま沖縄に漂着した」と答える。たまたま沖縄に流れ着いた。「椰子の実」とは逆に黒潮を溯^{さかのぼ}って沖縄にきた。遠い先祖が丸木舟で黒潮に乗って伊良湖岬^{いらごみさき}に流れついた。私は時空を超え、沖縄に漂着した経緯をお話する。

伊良湖岬の近くで生まれ育った。子供のころ、流れに身を任せ、海に浮かんでいるのが好きだった。海に浮かんでぼんやりしているといつの間にか海岸が、陸が視野から消える。地球が球^{きゅう}であることを実感する一瞬だ。しかし、突然、不安になる。岸に向かって夢中で泳ぎ始める。

流れに身を任せていた。1992年（平成4年）初夏、すべてが視野から消えた。不安になる。夢中で泳ぎ始める。国立大学内科教授は全国区。北は旭川、南は琉球。どこであろうと構わない。琉球大学が内科の教授を募集していた。どこの医学部であろうと行こうと決めていた。琉球大学も一つの選択。受験生の気持ちが分かる。沖縄は知らなかった。琉球の地を踏んだことはなかった。書類を提出した。

1993年（平成5年）2月22日月曜日にはじめて沖縄の地を踏んだ。活気にみちた那覇空港、そして椰子の並木道が私を迎えた。夜は「パナリ」で石垣牛を食べた。中部病院の安次嶺馨先生にご馳走になった。寒かった。ステーキを楽しんだあと、バーに行った。英語しか話せない米人女性がいた。米軍軍人夫人であるという。1972年（昭和47年）5月沖縄は日本に返還された。そして、1973年2月に固定相場制から変動相場制に移行した。固定相場制では1ドル360円だった。変動相場制に移行した結果、1973年には1ドル260円に高騰。1993年（平成5年）には1ドル110円、1994年には1ドル90円。年俸1万5千ドル貰っていた米軍人は、1972年には年540万円貰っていたのが、1993年には年150万円ということになる。月給10万円では物価の高い日本ではとてもやっていけない。割りのよい主婦のアルバイトだ。沖縄には米軍基地があるということを知った。翌23日火曜日面接。5月16日採用ということになった。5月16日は日曜日だった。5月17日月曜日が勤務初日。5月の連休中に梅雨^{つゆ}は終わっていた。夏だ。太陽は鋭く皮膚を突き刺した。太陽が痛かった。

知らなかった。「1944年（昭和19年）3月に沖縄守備軍・第32軍が創設されるまで、沖縄には軍事基地はなかった」ことを今まで知らなかった。沖縄は植民地台湾への途中の島々にすぎなかった。戦略上重要ではなかった。太平洋戦争末期にフィリピンやマリアナ諸島で日本軍が敗北していく過程で沖縄の軍事基地建設が始まった。1945年（昭和20年）3月、米軍は艦船1500隻と54万人の軍隊で人口45万人の沖縄を包囲した。攻撃を開始した。90日あまりの激戦で沖縄を陥落し、占領した。国内でただ一つ地上戦の行われた沖縄戦は、6月23日に終わった。20万人の死者をだした。米軍の戦死者も1万2000を超えた。米軍にとっても残酷な戦闘だった。それ以来、米軍は沖縄を占領した。1972年沖縄を日本に返還した。しかし、米軍

は広大な軍事基地を手放そうとはしない。利用している。日本復帰後、日本の米軍基地の75%が沖縄にある。沖縄県全体の面積の11%、沖縄本島の20%が米軍によって占有されている。沖縄を車で走るとどこに行っても基地。ごみごみした沖縄の街が突然消える。広々としたみどりの野原そしてきれいな建物が現れる。そこは米軍基地だ。これらの基地は「銃剣とブルドーザー」で建設された。

1945年（昭和20年）終戦時には沖縄の医師は10人だったという。1945年の人口およそ40万人。1972年（昭和47年）の人口は100万人。復帰のときの初代沖縄県知事屋良朝苗ちようびょうの声「沖縄県民100万人を代表し---」を覚えている。現在の人口137万人。2004年12月の医者数2784人、人口10万人当たり205人の医師がいる。医者の数は他県に比べて少なくはない。戦後の沖縄医師の極端な不足を補うため、1953年（昭和28年）から1986年（昭和61年）まで実施された国費留学生による医師の増加。そして1987年からは琉球大学医学部は第一期生を世に出している。沖縄県の医者の数が他県に比べて少ないわけではない。沖縄県は毎年160人の研修医を受け入れている。少なくはない。那覇近辺は医師過剰地域である。しかし、離島には医者やんぼるがいらない。北部山原には医者

がいらない。

1992年（平成4年）首里城が再建された。1993年（平成5年）5月に沖縄に漂着した。15年間医者づくり、医学教育に関与してきた。しかし、沖縄の医者不足は続いている。沖縄の基地はそのまま存続している。

名も知らぬ 遠き島より
流れ寄る 椰子の実一つ

故郷（ふるさと）の岸を 離れて
汝（なれ）はそも 波に幾月（いくつき）

旧（もと）の木は 生（お）いや茂れる
枝はなお 影をやなせる

思いやる 八重（やえ）の汐々（しおじお）
いずれの日にか 国に帰らん

島崎藤村「椰子の実」

追記：自伝「予言の風景」を出版します。ご希望の方は高須にお申し込みください。予算の範囲でお送りいたします。

Fax 098-895-1415





ブッダガヤの菩提樹で新たにわかったこと
～古文書に見る「聖なる菩提樹」の歴史(補遺)～

長嶺胃腸科内科外科医院
長嶺 信夫

土宜法龍の「木母堂全集」の記録

今年(2008年)の沖縄県医師会報(2,3月号)で報告した『古文書に見る「聖なる菩提樹」の歴史』の中で、解明されていない点として記載した現在のブッダガヤの菩提樹の由来に関して、次の2点の資料を得ることができた。これらの資料、特に土宜法龍の書簡でこれまでの疑問を解明することができた。

1. インド大菩提協会会長であるラストラパル博士(Dr.Rastrapal Mahathera)の著書「The Glory of Buddhagaya」。

現在の菩提樹について、「The present Bodhi Tree sprouted from the roots of the original one」と、古木の根から生えた樹であると記載している。

2. 土宜法龍の著書「木母堂全集」。

土宜法龍(1854-1923)は仁和寺や高野山の門跡、管長を歴任した明治、大正期の真言宗の高僧であり、1893年のシカゴ万国宗教会議に臨済宗円覚寺派管長・釈宗演(沖縄県医師会報2008年7月号で紹介)らとともに日本仏教代表として参加、日本の仏教を世界に紹介している。万国宗教会議には、スリランカの仏教指導者で、インド大菩提協会の創設者であるアナガリカ・ダルマパーラ居士も参加していて、法龍や宗演らと交流している。当時、ダルマパーラはヒンズー教徒の管理下にあったブッダガヤの大菩提寺をヒンズー教徒から仏教徒へ奪還する運動に全精力を注いでいた。

法龍は万国宗教会議の帰途、1894年4月にセイロン(スリランカ)の菩提樹寺を訪問、長老から菩提樹の一枝を贈呈されているが、法龍の著書「木母堂全集」の中に収録されている書

簡「コロポより」にその時の様子を次のように記している。

「二千四百年前の菩提樹は太く肥えたり。その或る枝を一枝、小僧に菩提樹の長老より附属状(シンハリ語)を添えて送り呉られしには、空前絶後の歡喜を生じ候。嗚呼佛陀伽耶の菩提樹はサンカラチャーリ等の難を経たる新樹なり。故に却りて其の根本には遠し。其の物は阿育王已來の一樹、實に思へば貴き物の第一に候」

法龍がセイロンを訪問したのは、ブッダガヤの主な発掘調査が終了していた時であり、また法龍はその後ブッダガヤも訪問している。発掘調査後のブッダガヤの実情を直接見た法龍の書簡は今回の疑問点を解決する決定的な証拠になる。また、1891年にダルマパーラが日本の釈興然や徳沢智恵蔵とともにブッダガヤを訪問した時の写真に金剛法座に接して10メートル以上に育った菩提樹が写っており(写真1)、法龍もこの樹を見たはずだ。

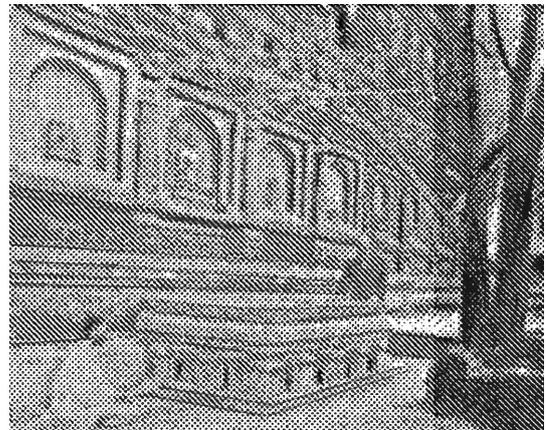


写真1. 1891年に大菩提寺を訪問した
ダルマパーラ居士(白衣)と菩提樹

ダルマパーラが大菩提寺を訪問した時の写真を見ると、菩提樹の根周りはすでに大きな電柱ほどの太さがあり、1891年の時点で樹齢10年以上になっていると考えられる。また樹の大きさから見て、一部の文献に新たに植樹した年として記載されている年(1885年)に菩提樹が植えられたとすると、1885年から1891年までは6年しか経っていないので、小さな苗木ではなく、大きく育った樹を植えていなければならない。

また、前田行貴博士の著書「佛跡巡礼」に記載されているように遺跡発掘調査後の1885年頃、イギリスの考古学者アレキサンダー・カニンガムによってスリランカのアヌラーダプラから実生がブッダガヤに運ばれてきて植樹されたとしたら、その6年後であるダルマパーラ訪問時(1891年)の樹の大きさからして、かなり大きく育った樹を遠路運んできて植えなければならず、現実問題として考えられない。もし、実生を運んでくるとしたら、当時の交通事情から手で持ち運びできるほどの樹でなければならないはずだ。またカニンガムが1892年に発行したブッダガヤの発掘調査報告書の中にも菩提樹の歴史と発掘時の状態が詳しく記載されているが、菩提樹が枯れた後、彼自身がスリランカから菩提樹を移植したという記録はみられない。

これらの事情を考慮すると、むしろ、カニンガムが、発掘調査報告書の中で「1876年に嵐で先代の樹が倒れ、枯れた時、沢山の種が採取され、また、すでにその場所に小さな子孫(苗木)が生えていた」と記載している点からみて、倒れた古木の種や近くに生えていた幼木が保存され、1880年以降発掘調査が終了した早い時期に、かなり大きく育った樹を現在地に移植したと考えたほうがよさそうである。(写真2)

また法龍がセイロンを訪問したのは発掘調査が終了してから約10年後の1894年であり、もしアヌラーダプラの菩提樹の分け樹がブッダガヤに移植されていたとすれば、当然その情報は法龍にも届いていただろう。そして、そうであれば、「木母堂全集」のように記載することはありえないはずだ。ちなみに、沖縄菩提樹苑の菩提樹3本は、5年前(2003年)受領した時、樹高38、44、55センチであったのが5年後の現在、樹高(台風の後一部カットしたが)約6~7メートル、胸高での幹の直径14~25センチ、幹囲43~70センチであり、カニンガムがブッダガヤを訪問した時の菩提樹の写真と比較すると約半分の大きさである。

カニンガムの記録

カニンガムは1880年の大菩提寺発掘調査時、現在の金剛法座のすぐ西側、すなわち、現在の菩提樹が生えている場所を掘り起こし、30フィート(9メートル)下の砂質土壌の中から菩提樹の木片遺物を発見している。9メートルの深さまで掘り下げたとなれば、金剛法座の移動はもとより、あたり一面掘り起こされた土に覆われていたであろう。発掘調査が終わり、整地した時点で金剛法座をもとの位置にもどし、その西側に現在の菩提樹の苗木が植樹されたと考えられる。

以上、今回入手した資料およびこれまでに記載した資料をもとに考察すると、現在のブッダガヤに生えている菩提樹は、先代の樹が枯れた後、新たにスリランカから移植された樹ではなく、1876年に嵐によって倒れた古木の根またはその種から生えた樹と考えるのが妥当といえよう(2008年6月記)。



写真2. ブッダガヤの大菩提寺大塔と菩提樹、金剛法座 (2003年7月撮影)

参考文献

1. 長嶺信夫：古文書に見る「聖なる菩提樹」の歴史、Vol.44 No.2-3,2008年
2. Rastrapal Mahathera：The Glory of Buddhagaya, International Meditation Center,Buddhagaya,1998
3. 土宜法龍著、宮崎忍海編：木母堂全集、大空社、1994年
4. A .Cunningham：MahaBodhi or The great buddist temple under the Bodhi tree at Buddhagaya, London (Indological Book House 版)、1892
5. 佐藤哲朗：大アジア思想活劇～仏教が結んだもうひとつの近代史～、オンブックス、2006年
6. 前田行貴：インドへの道 佛跡巡礼、蓮河舎、1989年